

【新春特集】北原進教授に聞く 江戸の経済・暮らし 心豊かな江戸に学ぶ知恵



あけましておめでとうございます。
新年を迎えると「今年の景気は？」という話題がメディアを賑わしますが、江戸の経済がご専門の江戸東京博物館・北原進教授(都市歴史研究室長)に、江戸時代の経済・暮らしなどのお話を、現代と対比させながら伺いました。

出席者 北原 進(江戸博教授)
聞き手 山口千恵子(事業部会)
大野 晴美(広報部会)
大松 駿一(広報部会)

.....

成長なくても豊かな暮らし

——私たちは子どものころから、江戸時代は随分封建的で抑圧された生活であったと教えられてきました。しかし、非常に進歩的な面があったようなのですが、経済・暮らしという面からはどうなのでしょう。

北原 昨年は江戸開府400年で、各種の催しが開かれましたが、江戸時代を理想的な社会として高く評価しすぎたかもしれません。それは修正しなければなりません。江戸時代の経済は、ほとんど成長していませんが、それでも人々の暮らしは豊かでした。経済

成長が仕合せだというのは現代経済学の問題でしょう。

——平和だったからでしょうか？

北原 それもあります。島原の乱か

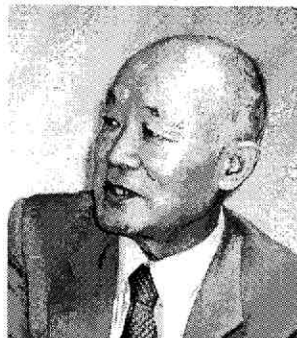
ら戊辰戦争まで大きな戦争は起きてはいません。

また、厳しい身分社会でしたが、江

戸では、それほど身分や階級を感じないで生活できたようです。厳しい時代であったことは確かで、あまり理想化してもいけません。

——食物の流通はどのようにして行われていたのでしょうか？

北原 最初は、江戸の周辺にあまり良い品物がなかったこともあって、年貢米と食品を除き消費物資のほとんどを上方に頼っていました。後期になって地回り経済が盛んになってくると、生鮮食品や薪炭などにもブランド品ができました。野田や銚子の醤油は地回りの優等生です。燃料は大量に



江戸を語る、北原進教授

ハ・イ・ラ・イ・ト

- 新年あけましておめでとうございます。本年も友の会活動に積極的なご参加、ご協力をお願いします。
- 新年祝辞 竹内館長、山本会長
- 新春特集「江戸の経済・暮らし」
- セミナーなどの活動報告
 - ・10/7 セミナー「藤沢周平と橋物語」
 - ・11/6 セミナー「代官の実像・虚像」
 - ・11/23 見学会「行徳街道めぐり」
 - ・12/1 特別観覧会「平賀源内展」
- えど友プラザ 会員投稿のページ
- 〈江戸博クリップ〉館員エッセー
- [シリーズ] ミュージアムショップ 名店めぐり(9)江戸更紗「二葉」
- 役員会・各部会「会議日誌」
- 《事業部会だより》
 - ・2/2 特別内覧会「円山応挙展」
 - ・2/7・22・29 創作講座「江戸切子」
 - ・2/18 見学会「常設展を見る」
 - ・3/6 セミナー「読み解き忠臣蔵」
 - ・3/14 創作講座「手描友禅」
- この会報は、皆さんと一緒に創るコミュニケーション情報誌です。ご意見、ご要望、投稿などをお気軽にお寄せください。

新年祝辞 さるなる発展に向って

江戸東京博物館 館長 竹内 誠

友の会会員の皆さま、あけましておめでとうございます。
平素よりのご支援に厚く御礼申し上げます。

昨年は、当館の開館10周年という大きな節目の年でした。また、江戸開府400年記念ということで、江戸と東京の歴史と文化に対して大きな関心が寄せられた1年でありました。おかげさまで当館にも多くのお客さまにご来館いただきました。

近年、公立の博物館、美術館をとりまく状況は大変厳しくなっております。新聞報道などでも、こうした話題が取り上げられることが多くなってまいりました。当館は利用者に親しまれる博物館、利用者とともに「生々発展」する博物館を目指し、職員一同、開館以来さまざま努力を重ねてまいりました。さらなる発展のため、今後ともたゆまぬ努力が必要と、新年にあたり心を引き締めております。

今年4年目を迎える「友の会」会員の皆さまには、当館の発展のために、より一層のお力添えをお願い申し上げますとともに、友の会のますますのご発展を期待しております。

新年祝辞 魅力ある集いに

江戸東京博物館友の会 会長 山本 市郎

友の会会員の皆さま新年おめでとうございます。

会員のご協力により、ますます発展を続けて3回目の春を迎えますことを喜ばしく、ご支援に感謝申し上げます。

本年も事業、広報、総務各部署が力を合せ発展に努力し、それが博物館への貢献につながると考えております。

さて、家族会員制度導入の件は早急に決めたいと考えており、次期総会にはご提案申し上げたいと思っております。その他、友の会活動として館外見学ツアーをより多く企画したり、学者・著名人の講師をお招きして江戸東京の楽しい話を聞くセミナーも準備しております。

また、会員の方でもまだ常設展を詳しく見てない方が多くおられるようですので、ボランティア・ガイドによる見学会も実施したいと思っております。幸い会員の中にガイドの方がたくさんおりますので、その方々にご協力をいただきたいと思っています。

友の会がますます魅力のある集いになるよう努めますので、積極的なご参加をお願い申し上げます。

必要ですから、江戸周辺の農山村でも枯枝や葉を集めて、燃料や肥料を作ると同時に、江戸向けの薪炭として送り出していました。

——燃料は毎日必要ですものね。

北原 灰を道の窪んだところへ置いて埋める風景は戦後まで見られました。ビニールなどのように、永遠に残る塵芥がなかったですよ。塵がやがては土になってしまう時代です。

野菜も花もいずれは生ごみになるわけですが、栽培されては肥料へとリサイクルされます。武家でも農家でも菊の花などいろいろな花が楽しむために繰り返し栽培されています。

商品化作物に手を加え、加工品が出てくると地回り経済が本格化する時代がやってくるのです。これまで上方の加工技術のすぐれた商品が江戸に出まわっていましたが、中期以降は関東の農民も職人も技術を向上させて、上等な商品を作り出すようになりました。

——それは資料で分かりますか。

北原 戦国時代から江戸初期に

かけて、俳諧の季題集や歌枕の本が多く作られます。それには全国各地の名物が載っていて、初期には上方の品物には多くの加工商品が出ているのです。関東の方は生魚や野菜で、第1次生産物が圧倒的です。

金・銀・銭 独自の三貨制度

——幕府の財政状態をみていますと時々財政再建をやっていますね。現在も同じことをやっています。江戸に学べなどと言われていますが。

北原 江戸時代は現代よりずっと自然に頼るところが多かったといっても、政治政策がきちんとなされていないと、町人や職人、商人の工夫も生かされません。そこを丁寧にみないと評価は難しいのです。

関東の商品経済化が遅かったのは関東の生産が米と雑穀に偏っていたからと考えられます。その米を経済の中心に据えて、石高制で全国を統一し、その石高制を補う度量衡を整備する。東国に産地が偏っている金(きん)を中心に、貨幣制度を決めています。関西の銀も産地に偏りが

あることは否定できません。

金銀貨の使用地域が東西に分かれていても、幕府は金中心の経済にもっていきたいのです。1700年代の前半ごろから金に統一した経済、金本位で銀貨や銭貨を位置づけるようにもっていくのです。

——上方は銀だけですか。

北原 そうです。銭もあまり出てこない。銀は利息や端数の計算がしやすいので、上方商人の帳簿の方が分析しやすいですね。金は大きっぱだし、しかも銀とか銭を補わないとなりません。

——算盤(そろばん)で計算するわけですね。

北原 昔の算盤が横に長いのは、金、銀、銭が分けて計算できたからでしょう。算盤の長さにも意味があるのです。

——九十六銭=百文とは？

北原 「九六銭(くろくせん)」とか「九六百(くろっぴゃく)」という計算法です。10進法の計算法からすると、不合理なことは確かですよ。でも東

南アジアなどでは今でも使われています。アジア式の合理性というか、2でも3でも割れる数字が九六銭にはあります。

二八そば、鍋焼きうどんの類が十六文、96の6分の1ですね。二足三文の下駄など端数の多い値段はそのためです。明治4年(1871)に我が国で初めて発行された郵便切手4種類の額面は、五百文・二百文・百文で、その下が四十八文となっていました。

そう、面白い話があります。数年前にヘビ屋がシマヘビを箱で仕入れるとき、100匹入りとなっていたにも内容は96匹だったと教えてもらいました。これは九六銭勘定です(笑い)。

江戸は現物取引が主流

——相場などはいかがでしょう。

北原 両替商や米、材木の商人は関西から相場を非常に早く手に入れました。ただし、江戸の商人は投機的な商法は苦手だったようです。大坂は、早くから空物取引が許可されていたので、見込み投機に慣れています。江戸と大坂の旅人が情報を交換し合って儲けたりする話も残っています。江戸は現物取引が多いのに対し、上方商人は先物取引が巧かった。江戸では材木や米なども、ほとんど現物取引です。その方が着実だと幕府は思っていたのでしょうか。

——江戸の地回りの産業が発達

してきますと、街道筋で小江戸と呼ばれる所ができていますが、こういったことから商売が発達してくるのでしょうか。



山口千恵子さん(事業部会)

北原 1700年代半ばごろは関東各地から在方商人が出てきます。大都市である江戸と何らかの関係を持つことによって、江戸の地回りの経済

を背負って出てくるのです。

早いところでは、元禄のころから田舎で菓子屋なんかを始めている。1700年代に入ると、江戸の周辺まで売り込みにやってくる人がいます。

例えば、甲州の葡萄や大きな柿は、生のまま江戸まで運んで来て、お月見前までに売ってしまおうというようなことをやっていました。

——輸送の方法はどのようにしていたのでしょうか。

北原 馬を使っていました。馬方が1人で20〜30頭も1本の縄で繋げて荷物を積んだのです。1頭は1駄ですから、炭だと4俵積めますから、ちょっとした貨物列車です。

街道ごとには荷物の積み降ろしをしないで、通して江戸に送っていました。街道の宿場としては「抜け荷」だと言って怒るわけです。荷物を差し止められると「生もの」などは腐るので紛争が起こります。街道を通るのが不便となると田圃のあぜ道を馬が通ってしまいます。

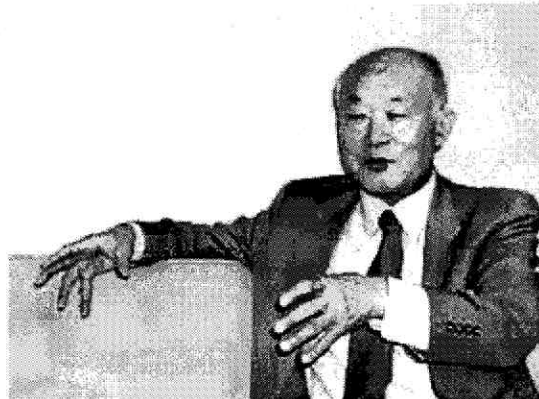
なにも正式な街道にとらわれる必要はないので、裏道はかなり使われたようです。街道には必ず脇街道や裏街道がありました。牛は細い道を通れませんし、遅かったので急行列車にそぐわないのです。

——馬以外の輸送手段は。

北原 陸上の輸送は馬ですが、船も使いました。船は荷物を多く積みまし、港で荷物の検査をしようとして江戸までそのまま直行できますから。厳密に言うと各藩に規制はありますが、幸い関東の周辺には大きな藩はないのです。本来なら津留をして、関所で調べなければいけないのですが、関東ではほとんどしていないのです。

庶民が勝ち取る規制緩和

——最近では規制緩和と言う言葉



ご近所へ年始回りが復活すれば活気づく—北原教授

がよく使われていますが、誰もが商売を興しても規制はないのですか。

北原 もちろんです。江戸では問屋や株仲間の規制があつて、強いところでははじかれます。しかし、必ず下から新興商人が既得権を崩して、新しい商業秩序を作ります。それを制度化するとやがて、また下から既得権の侵害をはじめる、そういうものなのです。例えば家康以来、街道での伝馬制度はできているのですが、甲州・信州の中馬は、江戸の商人と結びついて次第に伝馬を崩していくのです。

——幕府が行き詰まって、いろいろな改革が行われていきますね。四公六民が五公五民になったり、農民は大変だったでしょうね。



大野晴美さん(広報部会)

北原 何公何民というのは、一つの目安です。米の収穫高は公的に決められていて、一般に上方は江戸より村が大きく、生産力水準も高いとされていました。

しかし、制度は一度出来上がってしまっても、農業技術がそれを追い抜いて発展するにつれて農民の取り分が確保されていき、豊かになるきっかけがつかめるのです。

享保の改革などは、幕府やその他

の支配階級の財政が弱くなってくるから、政治改革を行うのです。民の取り分が少なくみえますが、生産力が上がっていますからかえって取れるようになるのです。全部取ってしまうのではなく、残しておくことによって、商品が流れます。

農民は米が残れば、そのまま江戸に流すこともあるし、粉にして加工品として出ることもあります。農民はそれを買集める商人や江戸の需要を見ながら米を出したりしています。そこで年貢ではなく、商業税を設けて幕府収入の増加をはかろうとする傾向が享保の改革後期の政策にみられます。新たに株仲間を作ったりするのはそのためです。

——田沼時代は派手ですね。

北原 この時代はいろいろな物が出てきて、後の文化文政という派手な時代の準備をしているのだと思います。ある時期、田沼時代は明治維新の原型を作ったという説もありました。幕末になって問題になる大都市周辺の生産・商業技術や経済の波などは、田沼時代の源流を重視するべきでしょう。その太り過ぎた商業資本を制限するために、松平定信が寛政の改革を行うのですが、実は江戸の大商人に資金を出させて改革を行うのです。幕藩体制の土台骨を崩すような商業資本を抑制していますが、不徹底に終わるから、文化文政になってまた商業資本が大きくなってしまふのです。

——商業資本を太らせるだけでは駄目なのですね。

北原 江戸幕府が続くかぎり、基本は農業生産なのです。幕末の文政改革ころまでは、農村の商人資本を制限したりもするのですが、天保や寛政の改革のように制限できないのです。江戸の商人は武士たちと一緒に育ってきていますから、商業資本が政治の上にかざるを得ないので

す。

——現在、1年間に3万人もの自殺者があるのですが、江戸時代、心中はあっても自殺者はなかったのでしょうか。経済的な面で困ったとか。

北原 借金苦や悩みなどでの自殺者はあったでしょうね。しかし、今のような、強引な取り立てや自分の利益のために人に害を及ぼすようなことは商業道徳として許されなかったと思います。

——失業問題はどうでしょうか。

北原 これもありました。終身雇用はなかったし、小僧から勤めてやがて、暖簾分けされても、主人と同じ商売はできない。なるべく他の商売を選ぶしかないのです。まだまだ商業市場は狭かったと言えます。

江戸のスローライフ

——今、スローライフなどの言葉が流行っています。江戸時代は今より貧しい中で、気持ちとして余裕があったと思うのですが？

北原 江戸時代の中ごろ、夏目成美という有名な俳人がいますが、彼は札差でもあり、また地方から出て来た小林一茶のパトロンでもあったのです。

一茶が江戸に来たときなどは、宿を提供し、生活費を与えているのです。帳簿上は奉公人として給料を支払っています。一茶は句会を開いて月謝も取っているのです。本居宣長などは弟子が歳暮に金2分をつけて自分の句を入れて送ると、宣長が歳暮の礼状と句の添削を送り返しています。

地方の文人に対して、江戸の商人も文化人として平等に付き合うようになり、地方の文人が江戸に出て来たとき宿屋に泊らせるのではなく、相手が分かれば泊めてやりました。今はそういう余裕はありませんね。

——共同体がちゃんとあったから、助け合いの精神もあったのでしょうか。

か。

北原 町でも村でも地域の人が守ってくれる安心感はあったでしょうね。亭主に死に別れたり、両親を亡くした子どもの面倒を見てやるという、地域社会が機能していたのです。

「年賀状」より「お年始」

——江戸の人が持っていた知恵を現代に生かすとしたら、どういったところでしょうか。

北原 例えば近所付き合いで思うのは、最近の年賀状のあり方です。近ごろお年始のあいさつまわりは衰えてしまいました。反対に1月1日に届くように年賀状を書くでしょう。12月は皆忙しいのです。本来は、お正月があけて直接年始のあいさつをするもので、年賀状はどうしてもお年始でできなかった人々に出したものです。2月に出している例もあります。原則的には年始のあいさつまわりするのが基本的な年賀の礼儀で、年賀状は略式にすぎません。

年始まわりが復活すれば、町々の共同体も復活してくる可能性はありますね。良い部分は少しずつでも復活しておいて、軋みに少し油をさしてやる必要があると思います。

——年始あいさつの「御慶」という落語がありましたが、御慶は今は死語になってしまいましたね。

北原 ご近所付き合いがなくなってしまい、隣に住んでいるのが誰かも分からなくなってしまいましたね。面倒くさくなくていいのかもしれませんが、寂しいことですね。おそらく、昔の人はお正月を迎えると豊かな気持ちになることを祈って、ご近所へ年始まわりをしたり、お正月のお日様を拝んだりしていたのでしょうね。

——どんな経済状態でも、気持ちは豊かに持ちたいものです。今日のお話でいろいろ参考になることができました。ありがとうございました。

【構成】広報部会・松原良、岡橋園子



第14回江戸東京博物館友の会セミナー(2003/10/7)

藤沢周平と「橋ものがたり」

～大川をめぐる市井の喜怒哀楽～

講師 井上 謙さん(元日本大学教授、近畿大学教授)

私が藤沢文学に関心を持ったのは平成5年(1993)NHKのテレビドラマ「三屋清左衛門残日録」を見てからで、そのころ定年近くなっていたせいか、清左衛門役の仲代達矢を通して今後の自分の生き方というものを、しみじみと考えさせられ一気に彼のファンになってしまったのです。また、藤沢が私と同世代で私の研究している作家横光利一の夫人と同じ鶴岡(山形県)出身であることもぐっと親しみを増す原因になりました。

「三屋清左衛門残日録」

清左衛門は海坂藩の用人でしたが今は退いて隠居の立場。そこへ色々な難題や事件が持ち込まれ、先達としての彼は広い度量と深い思慮でそれらを解決していくというのがドラマの内容です。その最後の「早春の光」で、しばらく疎遠だった親友、大塚平八を見舞おうと橋を渡ります。平八は無気力になり、外へ出たがらないのです。平八の家の近くまでやってきた清左衛門は、早春の光の中に、こちらに背を向けて、杖にすがって転びそうになりながら動いている彼の姿を見ます。清左衛門は声を掛けずにその場を立ち去ります。そして家に戻った清左衛門は、家人に「平八が、やっと歩く習練をはじめたぞ」と言ってこの作品は終わりますが、平八の姿と自分を結びつけた印象深いひと言です。

「橋ものがたり」

藤沢は、600編くらいの長短編を書いていますが、大半は時代小説です。ジャンルは広く、綿密に構成された文章や、人物描写、自然に対する観察力

の鋭さは見事というより言葉が見当たりません。彼の作品の中ででてる「海坂藩」は、彼の俳句が掲載された雑誌の海坂からとられたものです。湯田川中学で国語の教師をしていた藤沢は、頼まれて石碑に、

花合歓や 畦をあふるる 雨後の水
という藤沢らしい俳句を残しています。

江戸時代、隅田川に最初に架かったのが千住大橋、明暦の大火以降に武蔵と下総を結ぶ両国橋、永代橋、新大橋が架かりました。「橋ものがたり」は藤沢周平の市井の短編小説が10編集められて、それらがすべて橋に関わりを持った庶民の物語です。

「約束」

連作の第1作「約束」は、書き出しから10行ほどの文章に主人公、幸助の立場が簡潔に描かれています。

幸助の奉公先へ同じ町に住む幼なじみの蠟燭屋の娘、お蝶が訪ねてきます。幸助は仲町の料理屋へ奉公にでると言うお蝶の姿がいじらしく、5年後に小名木川にかかる萬年橋の上での再会を約束するのです。その約束の日、約束の七時半、お蝶はやってきません。幸助は4時間も待ち続けるのです。やっとお蝶が姿を見えます。お蝶は、すでに身を売った商売をしている自分を恥じて、なかなかすることができなかったのです。

しかし、幸助も奉公先の親方の妾に誘惑されています。お蝶は幸助に自分のことを告白して立ち去ります。翌朝、幸助はお蝶の家へ。そして二人は離れて暮らしてはいけないと愛を誓う。お蝶の号泣。狭い土間に差し込む朝日。

藤沢作品の末尾によく出る未来を暗示した明るいシーンです。

「小ぬか雨」

「小ぬか雨」は殺人犯にお嬢さんと言われて匿ってしまう一人暮らしの女。この男に比べて自分の男がいかに野卑に思えてきて、最後に殺人犯に連れて逃げてくれと頼みます。しかし、殺人犯は彼女に橋を渡ってはいけな

「思い違い」

3作目の「思い違い」は両国橋が舞台で、朝晩、同じ時刻に橋の上ですれ違う女・おゆうに何故か心ひかれる原作。その後、色々ないきさつがあつて、仕事仲間で行った女郎屋で相方になった女が、おゆうでした。それまで原作は自分と同じように朝は働きに行くところで、夕方は家へ帰るところだと思っていたのがまるで思い違いであったのに気付きます。朝は朝帰り、夕方は勤めに行くところだったのです。しかし、そんな素性が分かっても、おゆうの純粋さに心惹かれた彼は、女の借金20両を何年も貯めた金と、親方から仕事をもらって返済しおゆうを見請けしようと決意するのです。

今なお名残り漂う橋と地形

他の7編も橋を中心にして船頭、博打うち、蒔絵職人、母子、水茶屋の女など庶民の生活を背景に人生の哀歓を情感豊かな筆致で描いています。江戸を代表する隅田川——それに架かった橋と掘割りの小橋を中心にさまざまな人生ドラマが展開しますが、その舞台は現在の江東区で、風景はすっかり変わっているものの、一帯は今なお、その名残りの漂う地形となっていますので、「橋ものがたり」を手に当時を偲びながら、その周辺を散策するのも楽しいでしょう。

【記録】広報部会・岡橋園子



第15回江戸東京博物館友の会セミナー(2003/11/6)

江戸幕府代官の実像と虚像

講師 村上 直さん(法政大学名誉教授)

テレビの時代小説が盛んですが、代官というとても悪いイメージがつきまわっています。大岡越前や遠山の金さんとか奉行はみんな名奉行といわれるのに、代官はすぐ「悪代官」ということになります。残念なことです。水戸黄門の対象に出てくるから、みんな悪代官になってしまうのです。そこで、時代小説の人間像と真実はどう違うのかをお話したいと思います。

代官は地方行政官・技術官僚

まず、江戸幕府の職制と郡代・代官の位置ですが、江戸時代の制度や仕組みは大変よくできています。中央に江戸幕府があって、全国に各藩があり、そういう大名の間に幕府領(天領)が存在して、それを支配したのが代官・郡代で、幕府や藩にいた地方行政官で非常に重要な役職です。

江戸時代は平和でした。265年間、幕末まで大きな戦争はありませんでした。戦争がないとどういう利益があるかというと、戦費を使わないから、全部平和な道路や河川の改修とか、町をつくるとか、鉱山を開発するとかにに使えたのです。だから、江戸時代は文化が発達し充実していたのです。

平和な時代になると、官僚の登用も武功派から文吏派へと変わってきます。鉱山開発、治山治水などの技術官僚(テクノクラート)です。

悪代官? に顕彰碑

歴史上の人物の人間像はひとつの面だけで判断するのではなく、もっと客観的に史料を見ていきたいものです。

いろんな角度から見なければなりません。代官にしてもひとつの事件だけで善し悪しは決められないのです。悪代官といわれるところに行ってみると、そんなことはなくて農民が顕彰碑をつくっている例がかなりあります。

大久保長安の子供7人は処刑されていますが、この人物を調べると、石見銀山、佐渡の金山、伊豆の鉱山の開発、東海道や各街道の整備などを行っています。政治的な争いで処刑されましたが、たいへんな人物だったのです。その配下に岡上(おかのぼり)という代官がいて、桐生の近くに岡上用水を開削しています。この人は足尾銅山の支配をしたと言われています。幕府では処罰をしていますが、地元では地域開発で顕彰されているというくらい違うのです。

徳川時代初期の代官

代官は行政官で、いまの知事や市長と同じですが、選挙で選ばれたものではありません。世襲制度の時代であり、家格・身分・石高があって、生まれた時からスタートが違います。そういう意味の枠はあります。しかし、養子・足高(たしだか)の制度もあって、絶対的な土農工商ではなく人材の交流や登用が図られたのです。

政治の要諦の第一は、民の声をどう吸い上げるかにあります。それが名代官や名奉行の基準になるのです。家康は代官の上の代官頭に伊奈忠次など4人を配したのですが、違った経歴の4人に江戸を囲むように任命したのです。彼らが代官を従えて米づくり、米

のとれない台地の開発など地域の開発をしました。もう一つ関東総奉行という役職があって、これは徳川初期になくなりましたが、民政上重要な役割を果たしました。

関東中心に配置された代官所

天保10年(1839)に代官所のあった陣屋の地図を見ますと、日本の中心が東に片寄っていて、関東中心の仕組みであることが分かります。

日本全体を治めていくのに交通網の整備は非常に大事なことでしたが、五街道だけでなく脇街道などの整備や河川の舟運、海の廻船の整備にも大きな足跡を残している代官がたくさんいます。地域開発も代官の仕事でした。しかし、代官はまず年貢を取ることが一番の仕事でいわば税務署です。その上、警察・治安維持、飢饉対策、裁判・訴訟まで、少ない人数で大変な仕事でした。

代官(地方)が国を支える

町奉行は3千石だったのに代官は平均して150俵という薄給で、税収不足などのミスがあれば罷免されるという中間管理職のつらい立場でした。ですから民衆に慕われた代官が幕府から罷免されたという例もたくさんあります。

時代小説は民衆の願いを受けて名奉行や名代官を作り出すのです。それは悪いことではありませんが、歴史学では客観的な史実はきちんとおさえておかなければなりません。

江戸の中心は町奉行が支配していましたが、その周辺(品川・新宿・板橋・千住)の代官が地域開発をして100万都市・江戸の食糧の供給を支えたのです。

地方分権の社会では地域が国を支える方向に向かわなければならないので、郡代・代官の民政の実態を思い起こしてください。

【記録】広報部会・松原 良



第6回江戸東京博物館友の会 見学会(2003/11/23)

行徳街道めぐり

塩田と船着場跡

～宮本武蔵の遺跡をしのぶ～

昔から江戸との交流が盛んであった行徳(千葉県市川市)の史跡めぐりが11月23日(日)に開催されました。

江戸時代の行徳は、江戸とを結ぶ定期船が往来し、成田不動参拝の中継地でもあったことからたいそうな賑わいをみせました。しかし鉄道の発展に伴い水運が衰退し、港町行徳は徐々に寂れてしまいました。現在は新興地を中心に新しい都市として発展を続けている行徳ですが、今回はかつての船着場を中心に発展した江戸時代の面影を残す旧行徳の町、古き良き時代の行徳を偲ぶコースを散策しました。

午後1時に行徳駅改札口に集合した一行38名は、案内人の岩松精さん(総務部会長)から駅前の案内図でコース説明を受け出発。家康鷹狩の道と伝えられる当日のコースには、慶長年間建立の清岸寺や神明神社、芭蕉の句碑がある法善寺など、実に17カ所の神社仏閣が含まれていました。

休憩地点となった徳願寺は宮本武蔵とゆかりのあるお寺で、彼の思想が書かれた書や八方にらみの達磨絵などがあり、山門のすぐ横には武蔵の供養塔もありました。お寺の方から徳願寺の歴史についてお話いただき、境



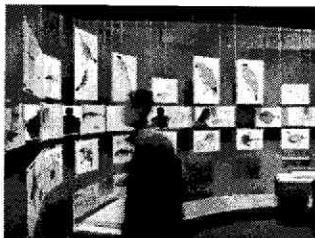
徳願寺は慶長15年(1610)建立で、宮本武蔵の供養地蔵や円山応挙の幽霊画などが伝わる。本堂で由緒・所蔵品伝来などを拝聴した。

内を見学した後、再び出発。

後半の道中ではかつて江戸から下総への旅途中に寄らない人はいなかったと言われる名店のうどん屋「笹屋」(建物現存)を通過し、西日を受けて穏やかな流れが美しい旧江戸川沿いを常夜灯(左上写真)へと歩き、終点の行徳駅で午後4時、散会しました。

東京のベッドタウンに江戸時代と武蔵の面影を訪ねた半日でした。

【取材】文・写真：広報部会・斉藤美香子



江戸東京博物館友の会 特別観覧会(2003/12/1)

平賀源内 展

旺盛なチャレンジ精神や国際人的感覚

江戸開府400年・開館10周年記念企画展の掉尾を飾る「平賀源内展」(会期:11/29-1/18)は、12月1日午後1時に特別観覧会が開催されました。生憎の雨で、参加者は会員61人を含む、200人弱、やや少なめでした。平賀家の当主、平賀一善氏も臨席されました。

竹内館長は「源内の旺盛なチャレンジ精神、世界の知識を入れて物品の輸出も考えていた国際人的感覚を称揚し、江戸の元気を吸収しよう」と挨拶で述べ、この展示は休館日を除くと、実質37日しかないこと、それゆえ集客宣伝に協力してほしい、と訴えました。主

催者の一員、東京新聞代表の宇治敏彦氏は、「源内はダ・ヴィンチのようなタイプの天才」、と所感を示されました。見学の後の招宴で、芳賀徹京都造形芸術大学学長は、「源内の『非常の人』と



源内といえば「エレキテル」。復元完成までに7年間を要した、という静電気発生装置

しての心の葛藤や挫折なども、理解できるのでは」、と締めくくりました。

この展示は平賀源内の可能な限りの全貌を、肖像、技術者、博物学者、芸術家、文士の5つの断面で展示したものです。これに時間軸を加え、更に源内自身が自分をどう評価し、自分にどの程度満足していたかまで理解しないと、芳賀徹氏の求める見方は難しいと思いますが、竹内・宇治・芳賀の諸氏のように、観衆がそれぞれに自由な見方で楽しめる展覧会だと思いました。

源内展と同時開催の「計量いま・むかし展」は小規模ですが、展示品は精選されていて、会場で無料配布されている小冊子の、高田誠二氏の簡潔な解説は学問的にも格調の高いものとお見受けしました。江戸博に行く方は、この展示を見逃さないよう、そして小冊子をもらうことを、おすすめします。

【取材】文：広報部会・佐藤幸彦、写真：同・巻瀾彰



えど友プラザ

友の会会員のページ

●最新情報は、ホームページ(えど友Web)で!

友の会の自主運営です。友の会の最新情報、お知らせ、活動予定や会報(えど友)のバックナンバー(Web版)もご覧になれます。会員のHPもご紹介いたします。詳細はHPを参照ください。

アドレスは、<http://www.edo-tomo.jp/>

川柳に見る 10年前の江戸博

松原 良

江戸東京博物館の「開館10周年記念」の年度も終わりに近づいています。そんな折、私が10年前初めてこの博物館に来たときの記録を最近見つけました。

実は私は「川柳庭の会」という会に入っていて、その会でここへ来ていてその記録があったのです。この会は、

俳句の吟行のようにどこかへ行ってそこで見聞きしたことをネタに川柳を作って楽しむ会なのです。見て歩く場所としては、公園、庭園、博物館、美術館、資料館、話題の町やスポットなど実にバラエティに富んでいます。

月1回のそんな会で江戸東京博物館へ来たのは平成5年(1993)5月13日で参加者は35名でした。そのときの記録を会長の竹内寿美子さんが「川柳東京」という冊子に「庭の会・その189」として書き残しています。

それをもとに当時の江戸博と川柳を見てみたいと思います。

まずゲートに入ってすぐの日本橋ですが、当時は橋の真ん中にチェーンの仕切りがあって、これをめぐってひと

もんちやくありました。私たちからすると、無粋でいただけないという感じがしたのと、それを川柳のネタにしたいということから、これは何のためにあるのか、何という名前なのか、とガードマンに質問攻めです。「皆さんが転ぶのを防ぐためです」「名前はパーティーチェーンです」などの答えが残っています。でもどうもあまりいいネタにならなかったようで、チェーンがらみの句は残っていません。

現在はこのチェーンはありませんが、日本橋については多くの句が作られていますので、その一部を並べてみます。

両国へ引越して来た日本橋
日本橋表も裏も見せてくれ

江戸博クリップ

江戸東京博物館の今年度企画展の目玉の一つであるNHKの大河ドラマ「武蔵」展は好評のうちに終了し、現在全国を巡回している。ドラマ最大のハイライト「巖流島の決闘」も既に放映され、TVも終盤を迎えようとしている。(2003年11月稿)

子供の頃、父の勤めの関係で毛利藩5万石の城下町長府(下関市)で育った。まだ日本全体が戦後の貧しい時代であり、関門海峡にも未だ橋の無い時代であった。今では夢物語のようにだが、関門連絡船の中から何度もまぢかに見たことがある巖流

島は、何の変哲もない小さな島であった。しかし、私にとって源平最後の戦いとなった壇ノ浦の青く速い潮流とともに大変懐かしい島でもある。

当時、長府の町に小さな博物館があった。小学校生であった私は、ある

巖流島に想う

参事 松岡 勝彦

時課外授業の一環として、先生に連れられてその博物館へ行った。

裸電球の下、小学校の大先輩でもある狩野芳崖の名作「悲母観音図」を見て、子供ながらに大変感動し、しばらく作品の前に立ちすくんでいた記憶がある。現在「悲母観音図」

は東京芸術大学の美術館が所有しており、数年に一度公開されるのを楽しみにしている。

江戸東京博物館には、毎日大勢の子供たちが来館しており、日本の子供たちだけではなく、時々訪れる外国の子供たちがボランティアの皆様の案内で、国境を越えて楽しそうに展示を見ている姿を見ると嬉しくなってくる。文化の重要性は決して一過性ではなく、一生の糧になる「何か」を与えることだと実感しており、そのためにこれからもベストを尽くしたいと思っている。

江戸東京博物館に対する友の会の皆様のお力添え、今後ともよろしく願っています。

◆このコラムは学芸員、館員が執筆しています。

日本橋渡れば江戸の幕が開き
日本橋渡ると山車に迎えられ
下駄の音させ渡りたい日本橋
今も変わらない所で川柳ネタで人
気の高かったのは、江戸ゾーンのお店
や長屋のあたりです。

棒手振と指物職が棟を割り
江戸からの伝統だったウサギ小屋
江戸の香が百味筆筒につまってる
屋飯か店番の居ぬえそうしや
九尺二間隣は多産系らしい
長男は性の神秘に畏まり

友の会の皆さんなら、あああの辺だ
なとすぐ分かる所ばかりかと思えます。
中にはこんな細かいところに目を付け
た句もあります。

江戸展の木組みに使うプラスネジ
助六の傘をとめてるピアノ線

こう見てくると、チェーンのことは別
にして10年前も私たちがたっぷり楽し
ませてくれた江戸東京博物館だったこ

とが、あらためて思い出されます。さら
なる10年に向けての発展を切に祈りま
す。

安政の台風

佐藤 幸彦

安政三年八月二十五日の夜半、碓
氷峠の途中の山中村にある立場茶屋
の主、丸屋六右衛門は強風と大雨に
夢を破られました。ここ数日、弱い雨が
続いていたのが、突然変化したので
す。近くの、風の通り道では多くの大
木がなぎ倒されました。山の谷や尾根
には「風の通り道」があつて、その带状
の道に沿って或る巾の森がなぎ倒され

るのです。

朝になって麓の坂本や信州の軽井
沢宿に人を出して尋ねさせたとこ
ろでは、多くの橋が落ちて交通は途絶して
いるということでした。

中山道は碓氷峠を越え、岩村田
(佐久市)、望月、長久保等の宿場を
過ぎ、和田峠を越えて諏訪を通り、塩
尻から木曾街道に入ります。碓氷峠の
麓の坂本宿から軽井沢宿までは2里
半(約10km)で、距離は短いが険しい
道が続き、途中に羽根石・山中と、2か
所の立て場がありました。立て場には
旅人の休憩のために数軒の茶屋があ
りました。旅人といっても、加賀百万石
の行列も、彦根の井伊様も、時には御
三家筆頭の尾張様の行列も、丸屋の
お客なのです。尾張様などは東海道
まわりの方が便利のように思いますが、
東海道は箱根の難所のみならず、
大井川を筆頭としてたくさんの川を河

江戸東京博物館ミュージアムショップ 名店めぐり〈9〉

江戸更紗「株式会社 二葉」

新宿ミニ博物館「染の里二葉苑」とし
て、染色工房を無料公開、展示即売もし
ている(株)二葉。意外にもそこは、ほどよ
く狭い道の両側に住宅の並ぶ一角でし
た。大江戸線中井駅下車5分(新宿区上
落合2-1-3)です。大正9年(1920)の創
業、「文次郎」を登録商標とする江戸更
紗(さらさ)は、東京都認定の「伝統工芸
品」となっています。

日本では室町時代の中ごろ、インド
やタイ、インドネシアから舶来した模様染
めの布を更紗と呼び、花鳥や人物のエ
キゾチックな紋様を珍重しました。江戸
時代の末には、それらを模倣して江戸で
も染められ、高価な茶道具を包む風呂
敷や茶ふくさ、羽織の裏などにも使われ
たといひます。

日本各地で染められた更紗ですが、
いま産業として残っているのは江戸更
紗と京更紗のみ。御所車や源氏物語の
風景などをとり込む雅な京更紗に対し、
江戸更紗は袴に用いられた江戸小紋
の伝統を汲んで、花柄でも何の花と言
いがたいほど紋様化されているのが特
徴です。色も鮮やかな京更紗に対し、江
戸更紗は深みがあつて渋い。

染めの技法としては型染めですが、
型紙を変えて30回も重ね摺ることで、濃
淡とりまぜた絶妙な色合いを出します。
職人として一人前になるには10年かか
るそうですが、染め物は材質や織り、気
温や湿度などによって微妙に色合が変
わり、そのコツを会得するのに果てしな
い努力が続けられる世界です。

昭和
初期に
は、安価
な木綿
更紗が
出まわ
りましたが、
現在はほ
とんど絹
を用いた
高級品の
み、着物
地1反で

30~40万円もします。

ミュージアムショップには小物類しか
置いていませんが、小さい物は若い職
人さん達の出番となる大切な舞台です。
テーブルセンターや印鑑入れなどのほ
か、更紗を透明なアクリル板に挟んで加
工したペンダントやカフスボタンなど新し
い趣向のものもあります。価格は600円か
ら。問い合わせはTEL.03-3364-0544。

【取材】文：広報部会・大野晴美、写
真：同 佐藤幸彦



江戸更紗について語る二葉4代目
の小林元文氏(右)

会議・会合 日誌

2003/10/1～11/30

◆役員会

10/9(木) 18時から開催。役員担当変更はがき返送結果の確認、各部会報告などについて協議した。出席9名。

11/13(木) 18時から開催。各部会報告のほか会則の見直しの進め方などを協議した。出席9名。

◆事業部会

10/16(木) 18時半から開催。11月に予定している事業の担当者の決定、12月以後の計画や特別セミナーの追加などを話し合った。出席13名。

11/20(木) 18時半から開催。11～12月事業の担当者・準備状況の確認、創作講座「手描き友禅」「江戸切子」への対応、追加事業などを話し合った。出席9名。

◆広報部会

10/24(金) 16時から開催。「えど友」第16号についての反省、第17号の内容と分担などを話し合った。出席

8名。

11/21(木) 16時から開催。「えど友」第17号の進捗確認を中心に行った。出席6名。

◆総務部会

10/30(木) 18時から会報(えど友第16号)の発送作業を行った。出席12名。

◆2003ワーキンググループ

[友の会実態調査実施組織]

回答データの入力、集計などの作業を分担して行う。結果の報告は次号になる予定。

口近くで渡るため、季節によっては大変コストがかかるのです。その点、中仙道は碓氷峠・和田峠と、比較的ゆるい塩尻峠の他はあまり難所がなかったの、コストがかからなかったのではないかと思います。

さて、三日後の八月二十八日になって、江戸の方から飛脚がやってきました。通りかかったのは加賀大聖寺藩の飛脚と信州須坂の飛脚です。その2人の情報によると、江戸に大嵐があつて、被害は前年の地震(安政二年十月二日、江戸の直下地震で、推定マグニチュード6.9。倒壊焼失 14000

余戸、死者4千余)よりも大変のようだというのです。さらにその後、旅人からいろいろ情報が入って来ます。江戸中の橋は大部分が落ち、品川宿の家は片側が残らず津波で海に引き込まれてしまった。品川から深川にかけて津波となり、多くの死者がでた。品川沖には大船は何処へ行ったのか一艘もなかった。等々です。武江年表を見ると「二十五日暮れて次第に降りしきり、南風烈しく戌の下刻より殊に甚だしく、近來稀なる大風雨にて——暁丑刻を過ぎて風雨ようやく鎮まり」と記し、被害状況も述べています。この記事が

ら、江戸は台風の右半分に入り、江戸の大嵐が静まる頃に碓氷峠は大荒れになったようです。当時の人達が時刻を正確に把握していたかどうか疑問ですが、どうやら大型の台風が相模湾あたりに上陸して北上し、群馬県、長野県、に大災害を与えて日本海に抜けたのではないのでしょうか。台風は信州の山岳地帯を通ると、わりあい早く弱るものです。丸屋六右衛門の記録は、江戸時代の情報伝播の状況が知られて、参考になります。(江戸時代には津波と高潮の区別はしなかったようです)

事業部会だより

これからの友の会活動のご案内です。

- * 参加申し込みをされた方は、やむを得ない事由のほかは、ご欠席されないようご協力ください。
- * 開催日順に掲載。申込方法は最終頁参照。

【訂正】前第16号9頁、セミナー案内「代官の虚像・実像」で講師略歴「都立大学大学院終了」は「…修了」に、おわびして訂正します。

古文書講座

●入門編 第3期

- ・開催日時 第1回 1月14日(水) 14:00～16:00
第2回 2月 4日(水) 14:00～16:00
第3回 3月10日(水) 14:00～16:00
- ・会場: 江戸東京博物館・1階会議室
- ・講師: 野尻泰弘さん(学習院大学大学院史学専攻)
- ・参加費: 全3回 1,000円(初回当日払い)
- ・新規申込締切: 1月8日(木)必着 (両講座申込可)
- ・第2期の受講者は継続になります。(申込不要)

●初級編 第3期

- ・開催日時 第1回 1月21日(水) 14:00～16:00
第2回 2月18日(水) 14:00～16:00
第3回 3月24日(水) 14:00～16:00
- ・会場: 江戸東京博物館・1階会議室
- ・講師: 西村慎太郎さん(学習院大学大学院史学専攻)
- ・参加費: 全3回 1,000円(初回当日払い)
- ・新規申込締切: 1月8日(木)必着 (両講座申込可)
- ・第2期の受講者は継続になります。(申込不要)

特別内覧会

特別展「円山応挙〈写生画〉創造への挑戦」展

- ・開催日:2月2日(月) 15:00~17:30 (受付14:30)
- ・申込締切:1月16日(金)必着
- ・会場:江戸東京博物館・1階ホール/企画展示室
- ・同伴者:2名まで可(ハガキに氏名連記)
- ・参加費:1人500円(会員・同伴者とも、当日払い)

◆円山応挙(1733~95)は、新たな「写生」の概念を確立し、従来の絵画観を一変させました。本展では重要文化財などの代表作をはじめ、新発見作品、資料も展示し、わかりやすく伝える新たな試みをふんだんに盛り込みます。

◆会期 2/3(火)~3/21(日)月曜休館
月曜が休日のときは翌日休館

創作講座

「江戸切子」

[A] ガラスの製造工程実演見学と体験

- ・開催日:2月7日(土) 14:00~16:00
- ・申込締切:1月7日(水)必着
- ・会場:三洋硝子(JR総武線平井駅下車)
- ・定員:20名 同伴者可(ハガキに氏名連記)
- ・参加費:会員2,200円、同伴者2,500円
(材料費込み、当日払い)

◆伝統的な江戸吹き硝子の手法による吹き硝子製造工程の実演見学後、熟練した吹き硝子職人さんの丁寧な指導による一輪挿し製作。

※[A][B]とも申込者がいないときは中止します。

・企画責任担当:黒瀬雅博(事業部会長)

[B] 江戸切子加工工程の実演見学とカット体験(3回)

- ・開催日:2月22日(日) 10:00~12:00(工程見学)
14:00~16:00(体験1回目)
- 2月29日(日) 10:00~13:00(体験2回目)
14:00~17:00(体験3回目)

・申込締切:1月22日(木)必着

(上記2日間通しての申込みになります)

- ・会場:江戸切子「秀石工房」(都営新宿線大島下車)
- ・講師:江東区無形文化財 須田秀石さん
- ・定員:8名 同伴者可(ハガキに氏名連記)
- ・参加費:会員11,090円、同伴者11,390円
(材料費込み、初回当日払い)

◆江戸切子模様をカットする工程の解説と実演を見学後、無形文化財の講師の丁寧な指導で江戸切子文様を5寸皿のクリスタルへカット。

見学会

第7回「常設展をじっくりと見る」

- ・開催日:2月18日(水) 13:00~15:30 (集合13:00 出発13:15)
- ・申込締切:2月2日(月)必着
- ・定員:50名 同伴者可(ハガキに氏名連記) 先着順受付
- ・参加費:会員無料。65歳以上の同伴者は第3水曜なので無料。その他の同伴者は観覧料一般600円、大専門生480円を各自払い。

◆集合場所:江戸博1階ホール前

◆友の会会員の「キホンノキ」である常設展をガイドつきでじっくりと、きちんと見ようという見学会です。常設展はだいたい前に見たけど...という方、この機会にぜひご覧ください。

・企画責任担当:松原 良(広報部会長)

友の会セミナー

第16回「古文書で読み解く忠臣蔵」

講師 佐藤 孔亮さん(古典芸能ライター)

- ・開催日:3月6日(土) 14:00~15:30
- ・申込締切:2月24日(火)必着
- ・会場:江戸東京博物館・1階学習室
- ・定員:60名 同伴者可(ハガキに氏名連記)
- ・参加費:会員200円、同伴者500円(当日払い)

◆赤穂事件に関して残されているたくさん記録の中から、史実としての要点を示す古文書を読み解きながら事件の真相に迫っていただきます。

講師略歴:さとう・こうすけ

1956年、大分県生まれ。立教大学文学部史学科卒。出版社勤務を経て独立、歌舞伎・落語・相撲などに精通。川柳・都々逸作家としても活躍中。

・企画責任担当:松原 良(広報部会長)

創作講座

伝統・友禅の世界「手描友禅」

講師 田中 光江さん

特別講師 佐藤 平八さん(友禅作家)

・開催日:3月14日(日) 10:00~16:00

・申込締切:2月14日(土)必着

・会場:江戸東京博物館・1階学習室

[A] 見学コース 「特別講師から解説、ビデオで技法紹介、講師の工程実演」

・定員:20名 同伴者可(ハガキに氏名連記)

・参加費:会員200円、同伴者500円(当日払い)

[B] 体験コース

「①ストール(6,000円)、②ブチスカーフ(3,500円)、③色紙(3,000円)」

・定員:10名 同伴者可(ハガキに氏名連記)

・参加費:上記(会員・同伴者とも同額、当日払い)

・申込時に[A]、[B](①、②、③)の希望を明記

※[B]の申込者が少ないときは、この企画全体が中止になることがあります。

・企画責任担当:黒瀬雅博(事業部会長)

講座受講 申込方法

お申込は
通常ハガキで

●通常ハガキでお申込ください。折り返し受講票をお送りします。当日ご持参の上、受付で登録ください。事前申込みがないと受講できません。必ず申込みをしてからご参加ください。

▼申込方法:

通常ハガキに①開催日、講座名②会員番号

③氏名(同伴者は連記)④〒住所⑤電話番号

を明記。友の会へのご意見・ご要望もどうぞ。

・各講座ごと、会員1人1通。

▼申込先:130-0015東京都墨田区横網1-4-1

江戸東京博物館友の会事務局あて

▼締め切り:各講座案内を参照(必着)

会員優待のお知らせ

【企画展】江戸開府400年 開館10周年記念

平賀源内 展

会期 11月29日(土)~16年1月18日(日)

月曜休館(月曜が休日の場合は翌日休館)

年末年始休館(12月28日~1月5日)

好評開催中

・図録 定価2,500円 会員10%割引(会員証提示)

【ご注意】会期中の企画展物販所のみで適用。

ミュージアムショップでは割引になりません。

会 員:一般450円、65歳以上220円、大専門生360円

同行者:一般720円、65歳以上360円、大専門生570円

【特別展】江戸開府400年 開館10周年記念

円山応挙〈写生画〉創造への挑戦 展

会期 2月3日(火)~3月21日(日)

月曜休館(月曜が休日の場合は翌日休館)

・図録 定価2,500円 会員10%割引(会員証提示)

【ご注意】会期中の会場出口物販所のみで適用。

ミュージアムショップでは割引になりません。

会 員:一般600円、65歳以上300円、大専門生480円

同行者:一般960円、65歳以上480円、大専門生760円

活動に参加しよう 各部会員を募集!

事業部会=事業の企画・運営、広報部会=〈えど友〉の編集・PR活動、総務部会=各種案内の発送・受付

ハガキに、希望部会名、会員番号、〒住所、氏名、電話、応募事由、を記載して、事務局までご応募ください。



隔月(奇数月)刊。次号は3月1日発行
<http://www.edo-tomo.jp/>

江戸東京博物館友の会

会報〈えど友〉第17号

発行日 平成16年(2004)1月1日

発行 江戸東京博物館友の会事務局◎

130-0015 東京都墨田区横網1-4-1

Tel. 03-3626-9910

編集・制作 友の会広報部会

発行・編集人/佐山彪(副会長) 編集主幹/松原良

編集/大松駿一、菅沼和男、岡橋園子、佐藤幸彦、小柳英二郎、

瀧口逸策、大野晴美、斉藤美香子 レイアウト・版下/巻瀨彰

【予告】企画展 NHK大河ドラマ「新選組!」展

会期:平成16年4月3日(土)~5月23日(日)